8 家　庭　科

須　崎　恵　子

1　家庭科と自立

子どもたちが生活している家庭や社会は，高度情報化，国際化，高齢化など大きく変化しており，今後もますます大きな変化に見まわれることが予測される。このような大規模な社会の変動に対応し，主体的に生きていくためには自ら学び自ら考える力の育成と基礎的・基本的な内容の定着，個性を生かす教育が不可欠であると考える。

新学習指導要領の家庭科の目標においてもこれまで以上に「体験的な活動」を重視している。それは，最近の子どもたちの実態として疑似体験や間接体験が多くなる一方で，生活体験・自然体験が乏しく，家事の時間も少ない子どもたちが多い傾向にあるためである。家庭においても家電製品の普及に伴い生活が便利になり，以前ほど体を動かして働かなくても快適に過ごすことができるようになっているので，子どもたちが家事に参加する機会も減っている。また，家族数も減り，地域との交流も希薄となっているので人と関わり合いながら生活することも少なくなっている。そのため，基本的な生活技能や勤労観の体得，人との協調性などについて修得することが難しく，自立が遅くなっているとも言われている。

家庭科学習においては子どもたちに家庭生活に関する基礎的な知識・技能を身につけることによって，主体的・能動的な参加を促し自立へ向かう子どもたちへの援助としたいと考える。

2　家庭科における自立と人やものとのかかわり

(1)　家庭科においての自立

子どもたちが主体的・能動的に生活に参加し自立に向かっていくためには，日常生活に必要な基礎的な技能を身につけると共に，その技能を実践する喜びを味わい，家庭生活をよりよくしようとする態度を育てなければいけない。そのためにはまず，技能を教え込むのではなく子どもたちなりに工夫し試す等，操作する段階を大事にしたい。そうすることによって家庭科で学習してことを生活のどの場面でどのように活用すればよいかがわかり，学習したことを生きる力とすることができると考える。

また，子どもたちの生活を見直し，自分がかけがえのない家族のために何ができるか考えることができるようにしたい。そして，子どもたちなりに家庭生活に関われることや，生活をよりよく変えることができることを試行錯誤しながら考えることができるような授業を設定する。このように主体的・能動的に一人一人の課題に取り組む過程で考えたり工夫したりすることで子どもたちに自立的生活能力を身につけることができるようにしたい。

(2)　家庭科においての人やものとのかかわり

家庭科では「家族」を学習の源と考える。授業で学んだことを家庭生活で実践することで子どもたちは知識や技能を「生きる力」とすることができる。そこで，家族や地域の人たちとの関わりの中で学びを深めていきたいと考える。

また，人とのかかわりだけでなく，生活に必要なもの特に「食物」とのかかわりも大切に見つめていきたい。子どもたちは以前と比べて多くの食品を食生活の中に取り入れているが，意外に「食べる喜び」を感じていないように思える。なぜ食べるのかを考えることによって他の生命を頂く事についても共に考えてみたい。

3　家庭科でめざす子ども像

上記のようなことをふまえて，目指す子ども像を次のように設定した。

①家族の一員としての自覚を持ち，自分にできる役割を進んで果たす子ども

②社会の変化に伴って生じる生活の中の課題を見つけ自分なりに解決していこうとする子ども

③自分と周りの人々や社会との関わりを見つめお互いに助け合ってよりよい生活をして行こうとする子ども

4　自立へ向かう子どもたちを育む家庭科の授業の具現化に向けて

(1)　家庭生活及び家族に対して「関心」を高める。

衣食住などの実践的・体験的な活動を通じ，子どもたちが生活実感をもち，家庭生活への関心を高めるようにしたい。とかくすると，子どもたちはだれかに何かをしてもらって生活しているという事実を意識し感謝することが希薄になりがちである。子どもたちなりに自分の生活や家族にことを意識して生活していくようにしたい。

(2)　体験的学習を取り入れる

少なくなっている子どもたちの生活経験を補っていけるよう一人一人が実際に自分の手を動かし，体を使って体験できる場の設定が大切である。これは技術面だけでなく思考面でも同じことが言える。学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めることができるようにしたい。

(3)　家族の一員として学ぶ立場を重視する

家族の中でのコミュニケーションが少なくなって家庭への所属感が薄れてきていると言われている。家庭科ではまず，家族の一員としての自覚を持ち，意識づけることが必要であると考える。さらに，自分と家族との関係から，近隣の人々との関わり等に発展させ，共に生きることの大切さを学ぶことができるようにしたい。

(4)　生活を工夫する実践的態度を育てる

家庭科の題材は生活の中にある。日常生活をよりよいものにするために自分はどうするべきかを考え，子どもたちなりに生活を工夫する態度を育てることが大切であると考える。そこで，自分の生活や家族の生活を観察し，生活への関心を高めるようにする。また，子どもたちが持っている自分や家族の生活がこうあればいいなという願いを生かすために，課題を設定し，その問題解決を通して生活を創意工夫する力を子どもたちに育てる必要があると考える。授業では，子どもたち一人一人の考え方，方法を大事にしながら，基礎的・基本的な生活の技能を身につけていけるようにしたい。

(5)　授業時間の工夫

授業時間を運用については，以下のような利点を考えている。

「30分」・・・話し合い活動や，実習のまとめなど

「40分」・・・課題設定や，簡単な実習・実験など

「30分＋40分」・・・調べ学習や時間のかかる実習・実験など

(6)　評価規準の在り方

学習の評価においては，子どもたちの学習過程を注意深く見取りたい。そのためには観点別の評価規準を作成し，子どもたち一人一人の個に応じた支援を考えたい。

また，単元のまとまりで評価するのではなく，評価項目や評価の場面を柔軟にして子どもたち一人一人の実態に応じて評価していきたい。

5　成果と課題

家庭科の目指す「自立へ向かう子どもたち」の姿を「家族の一員として家族とかかわり自分なりの責任を果たそうとする姿」ととらえ，成果と課題を述べていきたい。

＜成果＞

(1)　家族とかかわろうとしていたか。

子どもたちは自分たちの生活の重要な基盤となっている家族とどのようにかかわっていけばよいのだろうか。自分が家族のためにどんなことができるだろうか。大切な家族とのかかわりかたを見つめることで，子どもたちは自立への道を歩み始めることができる。その関わり方を今年度は「朝食作り」を通して見つめてみた。

今回は，劇の登場人物になってセリフを考えてみることにした。子どもたちもそれぞれ家庭の背景があり，プライバシーにも配慮する必要がある。劇中の人物になってセリフを考えることにより，かえってスムーズに意見を言いやすい面がみられた。また，登場人物に自分を重ね合わせ，自分もこのような生活に知らず知らずのうちになっているとの反省の言葉も聞かれた。

学校での学習を家庭でも活かすために，家庭でも朝食をつくることにし，家族とのふれあいの場を設定してみた。家族の人たちからは，とても好評で様々なアドバイスや感謝の言葉をいただいた。

子どもたちは忙しい生活の中，朝食を整えてくださる家族のひとたちの苦労に気づき，時間が無いと言って朝食を食べなかったりしたことを反省したようだった。何気ない生活の中にも家族の人たちの支えがあって成り立っていることに気づいたようである。これをきっかけとして，家族の人たちがどのように自分の生活にかかわってくださっているかをみつめ，自分からも積極的に家族とかかわることができるのではないかと考えている。

(2)　自分なりの責任を果たそうとしていたか

家庭科では，生活面から子どもたちの自立を援助したい。家庭科で学習した内容をその場だけのものとせず，家庭でも積極的に実践してもらいたいと願っている。家族一人一人が忙しくなってきており，なかなか食事時間を合わせることが難しくなってきているが，そのような状況の中でも子どもたちひとりひとりが中心となって一緒に食卓を囲むよう家族に働きかけているようである。

今回の朝食作りをきっかけとして，自分にしかできない家庭内での役割をみつけてほしいと願っている。

＜課題＞

以前と比べて私たちの生活は，とても豊かになり便利になってきている。家庭生活でも以前は時間をかけ，手間をかけて作っていた物が安く簡単に買えるようになってきた。

その中でも「食」にかかわる家事時間は確実に減ってきている。それにつれ，児童も「食」に関して労力を提供することもあまりないようだ。自分の前に置かれた食事がどのような経緯で作られてきたのか，どんなに多くの人たちの苦労の結果なのかについて思いをめぐらせることもなく，ただ口にするだけのようである。

「食」は，家庭生活の要である。愛情を込めた暖かい食事を家族の人たちと楽しく会話をしながらいただくと，体だけでなく心にも栄養が行き渡り心身ともに元気を得る。

しかしながら，外食・弧食・中食など，「食」を巡る話題や問題は今後もますます多くなってくるだろう。家庭での「食」の在り方について，少しづつでも子どもたちと共に考えてゆきたい。